これからの学術情報システムに関する意見交換会
（事前・会場質問及び回答の共有）

目次

これからの学術情報システム構築検討委員会 1
電子リソースデータ共有作業部会 3
ERDB-JP 3
LSP（Library Services Platform） 6
電子リソースデータ共有作業部会の検討スケジュール 9
NACSIS-CAT 検討作業部会 10
1 出版物理単位での書誌作成 11
1.1 VOL ばらし 13
2 書誌構造リンクの見直し 16
3.1 外部機関作成データ 18
3.2 著者名典拠データ 22
4 自動登録・自動リンクの強化 23
5 レコード調整の廃止 24
6.1 NACSIS-ILL 27
6.1.1 書誌の名寄せ 29
7 図書館システムへの対応 31
8 今後にむけて 33
9 その他 34
A-3 運用ルール 36

これからの学術情報システム構築検討委員会

1. 「これからの学術情報システムの在り方について」（H27.5.29）で掲げる方向性に関して，具体的な想定はあるのか。例えば 10 年後の電子情報資源の全体における割合や，ILL の件数等。

【回答】具体的な数値の想定はないが，例えば 10 年前から現在までの統計等は出ており，電子情報資源については増加の，印刷体の ILL 件数については減少傾向にあるのが現実である。

2. 委員会の議事要旨の理解を深めるために，作業部会の議事要旨・配布資料を公開できないか。

【回答】作業部会の検討内容のうち，公開可能な内容については委員会での活動報告等で提示している。分かりづらい点については，委員会資料・議事要旨の内容改善で対応させていただきたい。

3. 印刷体を中心とした NACSIS-CAT を利用した目録業務の人的リソースに関して，軽量化・合理化によって電子情報資源への再配分は可能なのか。

【回答】リソースの再配分というよりはワークフローの見直しだと考えている。印刷体・電子情報資源と分けずに「メタデータ」担当として今後は運用していくのがよいのではないか。

4. 統合的発見環境という目標に対して電子・紙という縦割りで検討するのが限界なのではないかと感じている。横割りで検討していくことはできないのか。

【回答】横割りで議論をするための前段階が終わりを迎えようとしているのではないかと感じているが，考え方によっては縦割りのまま検討することも十分に想定される。国際的な動きに寄り添いつつ，今後の有り様を考えていきたい。これまでデータの流れが一方通行（外→内）だったものを今後は相互にしたいと思っている。

5. 業務フローを変えていこう，という話なのだと理解できた。狭い範疇，紙だけのことだけを考えて紙の業務が減ったから人を減らす，というミクロの考え方ではなく，大学全体・業界全体でリソースの再配分と新規業務の PR が必要だと感じた。現在は「総合」目録で，みんなで作る・使うという趣旨だが，例えば目録を作るところ，所蔵登録をつけるだけ，といった，最終的に，JUSTICE や JPCOAR のような会員制の課金制度にな

った場合のことも考えているのか最新の検討状況を知りたい。
【回答】委員会で話題にはなっているが，明確な方向性は出ていない。今後各機関のみなさまからご意見をいただきながら考えていきたい。

6. CiNii Books に関しても NACSIS-CAT の変更とあわせて検討が進められるのか。
【回答】NACSIS-CAT の実施方針の内容も考慮に入れつつ，引き続き検討したい。

7. 意見交換会後に検討方針の変更はあり得るのか。
【回答】基本方針に変更予定はないが，具体的な実現方法や運用手順等については，いただいたご意見を参考に調整していきたいと考えている。

8. 今後も意見交換会のような場は設けられるのか。
【回答】今後も開催する方向で検討している。

9. 意見交換会以外のタイミングで意見を伝えたい場合はどのようにすればよいか。
【回答】委員会 Web サイトに事務局の連絡先を公開しているので，そちらにご連絡いただきたい。

電子リソースデータ共有作業部会

ERDB-JP

■ERDB-JP を利用するメリット

1. 特にディスカバリサービスを導入していない機関の場合，ERDB-JP のメリットが分かりづらいように感じる。例えば CiNii Books のようなサービスで利用ができるようになると分かりやすいのではないか。

【回答】ERDB-JP のデータに NCID が入っていれば，CiNii Books と連携して電子版の本文へのリンクが表示されている。電子版のデータがあるのに ERDB-JP に登録されていない等，適切にメンテナンスされていないと使えるはずのデータが使えないことになる。ぜひパートナーになってデータメンテナンスにご協力いただきたい。

参考：パートナーとは　https://erdb-jp.nii.ac.jp/ja/content/whats_partners

■ERDB-JP の課題

2. 現行の ERDB-JP の課題について。
   - 著者名が姓しか登録できない
   - 冊子体と異なり，データ登録の基準が最新号になるので混乱する
   - 変遷前誌が 1 誌しか登録できない
   - タイトルの文字数制限がある

【回答】KBART という国際標準の登録項目を拡張して使っているため，その範囲で追加することは考えられる。KBART の次のフォーマットについては国際的にも検討過程である。作業部会では，過去に KBART2 策定の際に CEAL（The Council on East Asian Libraries）を通じて日本側の意見を提出したこともあったので，今後も現場からの声を集めて提案，またはガイドラインの改訂で対応していきたいと考えている。不明な点があればご照会いただきたい。

参考：KBART 形式について　https://erdb-jp.nii.ac.jp/ja/content/metadata_schema

3. タイトル変遷や採録基準について，これまでの問い合わせ事例を公開してもらえないか。登録ルールの自由度が高いために判断に迷うことが多い。

【回答】たとえば問い合わせ内容を盛り込んだガイドラインや，FAQ などを充実させることができないか，検討したい。

■ERDB-JP の登録データ

4. 電子ブックの書誌は，NACSIS-CAT と ERDB-JP，どちらに登録すればよいか。

【回答】電子ブック（デジタルアーカイブ，商用電子ブック，リポジトリにある博士論文）をどう扱うか, ERDB-JP のようなもので管理するのがよいのか, 引き続き NACSIS-CAT で管理した方がよいのかは検討段階である。電子リソースの場合は, メタデータだけでなく, ライセンスや利用条件等の情報も必要になるので, 業務者・利用者双方に対して，どのように設計すればよいかを考えなければならない。

5. 今後，ERDB-JP が図書のデータも充実させていくと考えていいのか。

【回答】国際日本文化研究センターの刊行物の電子版や国文学研究資料館が提供する「新日本古典籍総合データベース」のデータ等，図書のデータも入りつつあり，今後，電子ブックはますます重要度が高まっていくと考えている。既に実装されている JAIRO Cloud との自動連携については, まず雑誌で自動連携のフローが定着してから, 図書についても進めたいと考えている。ERDB-JP に登録された図書は現時点では CiNii Books で活用されていないが，今後は連携対象に含める予定である。

6. パートナー機関以外の出版物はどうするのか。また，ISSN がないものや官公庁のホームページだけがあるものなども登録の視野に入っているか。

【回答】旧 JJRNavi，ISSN センターなどから元となるデータを集めたので，パートナー機関以外のデータもあり,既存のパートナー機関によってメンテナンスも行われている。ISSN がないデータであっても，NCID や NDL 書誌 ID 等，他サービスとの連携に利用可能なキーは登録項目として用意しているので, 積極的に登録していただきたいが, 自機関のものであれば別途 ISSN の取得も考えていただきたい。官公庁のホームページのみに掲載されているデータも既に登録データとして存在している。

■ERDB-JP のデータ活用

7. XML 形式でもエクスポートできないか。OPAC に投入する場合は，XML 形式が好ましい。

【回答】今後の検討事項としたい。

■ERDB-JP のデータメンテナンス

8. ERDB-JP のデータメンテナンスが，特定のパートナー機関に集中するのではないか,

という懸念がある。

【回答】パートナーはデータに対する権限が異なる A（＝全データメンテナンス可能）と B（＝自機関データのみメンテナンス可能）の 2 種類を用意しているので，まずはパートナーB になっていただき，各パートナーが最低限自機関のデータメンテナンスに携わっていただければ作業は拡散するのではないかと考えている。ERDB-JP は，機関リポジトリに登録しただけでは不十分な国際的な，データ流通をサポートしている。JAIRO Cloud による自動連携等も活用しつつ，データメンテナンスにご協力いただきたい。

9. 目録業務が省力化した場合に，その省力化されたリソースは例えば ERDB-JP に充てられるのではないか。

【回答】ERDB-JP に充てられるのはもちろんのこと，現状，紙媒体と電子媒体ではシステムが異なるが，例えば LSP 等でどちらの媒体も含めて包括的に管理し，全体を通したワークフローの整理をする選択肢もありうる。具体的なロードマップはまだないが，新しいワークフローや新しい業務システムのグランドデザインが必要だと感じている。

10. ERDB-JP で扱う情報（リンク切れ，登録漏れ等）は，ILL 担当は気づくが，データの登録担当は逆に気づきづらい。業務委託が進んでいる現状を鑑みると，電子リソースの管理は誰が行うべきか難しいと感じている。

【回答】電子リソースの管理は比較的新しい仕事で，所掌が確立していないところも多いのではないか。たとえばリンクリゾルバについて，契約担当者が担当している例もあるが，ILL 担当の気づきが反映できていないこともある。当作業部会では，LSP の検証を通してお寄せいただいたようなギャップをうまく埋められるようなワークフローも検討したいと考えている。

LSP（Library Services Platform）

■LSP の可能性・メリット

11. コンソーシアムで LSP を導入した場合の各機関の利用モデルを教えて欲しい。

【回答】コンソーシアム事務局のみに導入するモデルと，コンソーシアム事務局と参加機関両方に導入するモデルが考えられる。後者のモデルの場合は，コンソーシアム内での利用条件やタイトルリストの共有が期待できる。前者のモデルの場合は，コンソーシアム事務局が管理する利用条件やタイトルリストを，LSP 外の各機関がダウンロード可能にする，という運用モデルがありうる。

参考：大谷周平. Library Services Platform の現在. カレントアウェアネス. 2015, (326), CA1861, p. 9-14. http://current.ndl.go.jp/ca1861

上野友稔，香川朋子，片岡真. 共同運用による図書館システム導入の新たな可能性. カレントアウェアネス. 2017, (331), CA1896, p. 22-28. http://current.ndl.go.jp/ca1896

12. ERMS 機能を利用すると，具体的にどのような強みがあるのか。

【回答】昨年度の内容をコピーして今年度用に上書きするというような，経年でのデータ管理が可能になり，契約終了年や過去の契約条件等の確認作業が容易になると考えている。

13. 図書館システムとリポジトリシステムは将来的に統合されるのか。

【回答】海外では，今年度，当作業部会が検証した Ex Libris 社の Alma を使ってリポジトリを運用している事例もあるが，日本の場合にはすでに機関リポジトリが先行して運用されている場合が多いため，２つのシステムを並行して運用している機関が大半である。また，JAIRO Cloud が日本の機関リポジトリ導入機関の半数以上を占めている点も踏まえる必要がある。

■LSP への期待

14. 発表スライドで，LSP で JUSTICE 提供条件などをローカルの参加館で見せる図が示されているが，一つのところで修正すれば一斉に修正される，ということが実現するのか。たとえば JMLA の提案で契約することもあるが，他のコンソーシアムでも提供条件を１か所で修正すれば，手間をかけずに反映できるのか。

【回答】当作業部会としてもそのようなフローが理想的であると考えている。現在は JUSTICE 提案書のデータ化のフォーマット等を検討しており，１か所で確認したものを各

大学でも使えるモデルを目指している。

15. 電子リソースの契約条件の ILL 可などの情報の共有により，調査に費やしている時間を節約し，人的作業を軽減したい。

【回答】Alma の検証作業の一環として，JUSTICE 提案書の内容をどのように共有できるのかを，検討している。管理方法が紙や Excel，共有フォルダという状況を改善したい。

16. 各大学の電子の利用状況やライセンス情報を公開・共有されるようにしてほしい。

【回答】大学や機関によって利用状況も，ライセンス情報のうち公開・共有可能な範囲も異なる可能性がある。まずは JUSTICE 提案書として共有されている情報を会員館がスムーズに利用可能になる環境の整備に取り組み，各館同士での共有はその次の段階として検討していきたい。

17. ERMS や LSP に触れる機会が少ない。デモサイトを公開してほしい。

【回答】テスト用で利用しているものをそのままというかたちでは難しいが，ERMS や LSP がイメージしやすくなるよう，何らかの方法が考えられないか検討する。

■LSP の検討状況・検討範囲

18. LSP の検証とあるが，検討状況と導入手法を教えてほしい。

【回答】2017 年度は Ex Libris 社の Alma という製品についてワークフロー等々の検証を行っている。また，海外の費用分担など，運用事例の調査を通じて，導入した場合の利用可能性の検証を行っている段階である。

19. 現在の作業部会の検討において重きを置いているところは，管理面なのかサービス面なのか。例えば JUSTICE 提案書に関して，LSP を利用すれば，会員館が自館の情報（例えば FTE）を登録しておくと該当する契約条件が出るようになるのか，または，LSP の API 利用を通じてリンクリゾルバで利用条件が表示される等か，どちらか。

【回答】JUSTICE との連携が次の段階だと考えている。JUSTICE が提供するタイトルリストと利用条件を実際に検証中の LSP に登録し，どのようにコンソーシアム内で共有し，各会員館で活用可能かを検討したいと考えている。どちらに重きを置いているというよりは，順番に課題を解決したいと考えている。

20. LSP について，電子リソース管理の部分だけを管理ツールとして受け入れるのか，それとも，貸出等を含んだトータルシステムとして受け入れるのか，どちらを想定しているのか。統合的発見環境というものを考えたときに，NACSIS-CAT の情報も LSP で扱う，といった検討はなされているのか。

【回答】LSP 検証作業において，冊子体を含めた検証は課題であると認識している。委員会が 2015 年に提示した「これからの学術情報システムの在り方について」という文書内で「当面の課題」として設定した内容に関して，まずは各作業部会に検討している。なお，当作業部会で，LSP の電子媒体に関する機能検証を行った結果，紙媒体についても取り扱いできる可能性がある，ということは付随的に見えてきた状況である。

参考：これからの学術情報システムの在り方について

http://www.nii.ac.jp/content/korekara/archive/korekara_doc20150529.pdf

電子リソースデータ共有作業部会の検討スケジュール

21. NACSIS-CAT 検討作業部会と同様に，電子リソースデータ共有作業部会の検討スケジュールを提示してほしい。

【回答】Alma の検証については，今年度報告書を公開予定である。今後の検討も含めたロードマップの提示については検討の上，対応したい。

NACSIS-CAT 検討作業部会

この回答は，最新の検討状況を反映したものである。意見交換会後に「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（実施方針）」からの変更について」を公開したが，変更のポイントである PREBOOK,RELATION については,意見交換会の段階では検討中であったため,意見交換会当日の回答はそれを前提としていない。そのため今回の回答と意見公開会での回答が異なる場合がある。変更の要点は以下である。

・新たに PREBOOK データセットを設け，参照 MARC のシステム登録は従来の BOOK にではなく，PREBOOK に行う。

・システム登録の際に，同一の ISBN をもつ書誌が存在する場合には，新たに登録せずに，分類，件名等の情報を抽出し，既登録書誌にシステム的に追加することとし，システムによる並立書誌の登録は回避する。

・目録業務に対して BOOK と PREBOOK のシームレスな横断検索環境を提供する。参加館が PREBOOK 中の書誌に対して，所蔵登録を行った時点で，該当書誌はシステム的に自動的に BOOK に移行させ，所蔵が未登録の書誌は PREBOOK 上のみ存在を許容することとする。

・ILL 業務については，BOOK のみを対象として検索を行い，所蔵未登録書誌は検索対象としない。

・すべての参照 MARC の書誌は，PREBOOK に登録された書誌も含めて従来の参照ファイルに登録する予定である。

なお現在も検討中の事項が含まれており，今後も内容が変更される可能性がある。

1 出版物理単位での書誌作成

1. 既存の NACSIS-CAT 上の書誌のデータ構造について，遡及して VOL ばらし等のフラット化（VOL ばらし，リンクの任意化）を行うのか？または新基準以前・以後で異なる書誌構造のデータが並存するのか。

【回答】遡求的な適用については予定していない。機械的な処理では，書誌の各 VOL と各館の所蔵データとのリンク付けや，NACSIS-CAT データとローカルデータとのリンク付けが保証できないためである。そのため NACSIS-CAT 内に新旧の基準の書誌が並存することになる。

2. VOL ばらしは遡及的に行うのか，また各館で書誌をばらすかどうかについて検討する必要があると思うが，NII で機関ごとに，何万冊あってもやっていただけるという理解でよいのか。

【回答】現時点では既存の VOL をばらすのは考えていない。これは 機械的な処理では，書誌の各 VOL と各館の所蔵データとのリンク付けや，NACSIS-CAT データとローカルデータとのリンク付けが保証できないためである。しかし参加館からの要望があれば，NACSIS-CAT で VOL を分割した書誌を提供し，ローカルで取り込む機能については検討したい。ただしローカルのデータと NACSIS-CAT 上のデータとで書誌単位が変わってしまうことになる可能性がある。

3. 書誌を正規化せず，重複を認めることで，データの重複が多くなり，結果として軽量化にならないのではないか。

【回答】参加館からの意見や NII・作業部会での検討を受け，実施方針発表当初と比較して並立の発生は大幅に抑えられる見込みである。また，全ての重複を無条件に認めるわけではない。書誌利用においては，機械処理によるデータのリッチ化や他のデータベースとの相互利用をはかることにより，利用者の便宜を図ることを目指している。

4. 書誌階層に関して中位の書誌についても検討いただきたい。特に雑誌の場合には，商用データベースでは特集タイトル等も登録されているケースもある。

【回答】今回は雑誌については見直しの対象としていないし，中位の書誌の検討は進めていないが，特集タイトルなどについては，CAT のシステム内で考えるだけではなく，他のシステムとの相互運用の問題として考えていく必要があると考えている。

5. 例えば機関リポジトリ等で刊行物のデータを作成すると，CAT とは異なるルールでデータが登録される。今後電子リソースのデータとの融合を考えていったときにそういったルールの統一についても検討されているのか。

【回答】現時点では検討は進んでいない。データのスキーマや品質については業界全体で検討していかなければならないと考えている。

6. 例えば一度に刊行された 10 冊セットの本があるとして，すべての VOL について編者・著者などの情報が共通している場合は出版物理単位ではなく VOL 積みの方がよいのではないか？例えば書誌に修正が生じた際に現行であれば 1 書誌を修正すれば良いのに，今後は 10 書誌分を修正しなくてはいけないことにはならないか。

【回答】VOL 積みで済ませる方が作業量が少ない場合があることは理解しているが，他システムとの相互利用性も考え VOL 積みは基本的に中止していただきたい。VOL 積みの際に形態情報などを捨てたり，無理に編者・著者などの情報を一書誌にまとめている事もあると考えている。例としてあげていただいた書誌修正の場合なども，その修正が所蔵している資料の全てに適用可能かどうか，一件一件確認が必要であろうし，それにあわせて書誌を修正いただきたい。

1.1 VOL ばらし

7. 書誌作成単位を出版物理単位に変更した書誌（VOL ばらし）を作成してよいのは，いつからなのか。「VOL ばらし」のように取り組みやすいところから，というような段階的な移行となる可能性はあるのか。それとも一斉の切り替えとなるのか。

【回答】出版物理単位での書誌データ新規作成は 2020 年 4 月からを計画しており，それより前に，VOL を分割した場合には書誌調整の対象となる。しかし出版物理単位での書誌作成を早期に始めたい，と言う意見もいくつもあったため，前倒しの可否については検討したい。

8. 出版年によっては，上と中は VOL 積みの書誌，下のみ VOL ばらしの書誌，という現象が起きると予想されるが，こういったケースでも VOL 積みは認められないのか？ いつ始めても同じ問題は起きるであろうが。

【回答】指摘のとおりで，例として挙げていただいたような，従来は一書誌だったものが途中から別書誌となるケースが発生すると考えている。しかしどこかで時期を切らなければならないし，2020 年 4 月以降は基本的に VOL の追加は不可とする。

9. 新基準適用後に，VOL 積みされた書誌が既にある資料に対して，VOL をばらしたフラットな書誌を新たに作成することは可能か。

【回答】可能である。

10. 新基準適用後も，書誌作成単位を出版物理単位でなく VOL グループの繰り返しによって複数の出版物理単位を表現することを許容し，また既存書誌データに対する VOL グループ追加を禁止しないで欲しい。特に年鑑等の場合，VOL グループ追加を禁止すると，従来は VOL 追加で済んでいたところで，毎年新たな書誌の作成が必要となり作業量が増える。さらに書誌データ件数も現状より大幅に増えることになる。

【回答】新基準適用後は，和漢古書，マイクロフィルム等の一部例外以外は，VOL グループによる出版物理単位表現は中止とする。これは他のシステムとの相互運用性の向上と外部機関作成書誌データ活用による業務効率化という観点からのものであり，VOL 積みの際に様々な情報を捨て，かつ他のシステムとの連携が難しくなっている現状を回避するための方策なので，御理解いただきたい。

11. VOL 積みの廃止によって 2020 以前/以後の書誌データの見え方が変わってしまうが，各大学のローカルでの見せ方については完全に各大学に委ねられるのか。それとも何らかの対応案を考えているのか。ILL 用に名寄せしたデータを各館の図書館システムで利用するなどの何らかの対応を検討しているか。

【回答】各大学のローカルでの表示の仕方については，各大学にお任せしたい。また実装方針の変更があり，名寄せによる書誌マージは作成せず，並立書誌間の対応表作成（RELATION)と言う形で実装を行う計画である。実装方針の説明は，各図書館ベンダーと意見交換中である。

12. 既存の VOL 積みの書誌については，新基準適用後も VOL を追加してもよいのではないか。

【回答】既存書誌への VOL 追加を継続すると，書誌調整等の旧基準の運用体制を今度も維持し続けなければならないため，基準移行は一斉に実施予定である。

13. 例えば新基準適用前に 1-5 巻が刊行されており，適用後に 6 巻が出た場合，CiNii Books 上では一体となって見せるのか。各館の OPAC で一体として見せたければ，図書館とベンダーの調整事項になるのか。

【回答】CiNii Books 上では現在の仕様のままだと，一体でなく 1-5 巻と 6 巻に分かれて表示されるが，最終的な方向はこれから検討したい。各館の OPAC で一体として見せたい場合には，ローカルの図書館システム側で対応していただくことになる。

14. VOL のインデックスについて ILL に関するスライド部分に記載があるが，CAT でも利用可能だという理解でよいのか。その場合，図書館システムのインデックスの再作成のため，図書館システムの停止期間が発生することを心配している。

【回答】ILL だけでなく CAT でもできるように検討している。図書館システムの対応については NII とベンダーとで意見交換をしているが，各館のシステム停止期間については個別にベンダーとご相談いただくことになる。

15. VOL 積みに関して，古典籍に関してまとめ書きをしたいというのは理解できるが，どこにランディングページを持つかは，作成者が決めてもよいのではないか。例えば DOI については一つの DOI のページ内にいくつコンテンツがあってもよい，というルールになっている。そのあたりとの整合性についてはどうか。

【回答】古典籍については，CAT であつかう場合には VOL 積みで扱かうが，デジタルアーカイブとして扱う場合にはランディングページについては, 御指摘の通り, 作成者の裁量に任せることになる。CAT とデジタルアーカイブの相互運用をどのように行なっていくか, コンテンツへの DOI 付与とも絡めて考えていきたいとは思っているが，現時点では未検討である。

2 書誌構造リンクの見直し

16. 新システムでは，シリーズ名を ID で管理しなくなるので，同一シリーズに含まれる本だけを集める，といった検索はできなくなるのか。

【回答】ID 管理について，親書誌へのリンクは必須事項から任意事項へ変更したが，同一シリーズの書誌をリンク付けする必要がある場合に各機関で従来と同様にリンクを張り管理することは可能であり，必要に応じてリンクを張っていただきたい。ただし必須事項ではないので，従来と比べると網羅性は低下すると思われる。

17. 「シリーズ情報を書誌データに記述するにとどめる」というのは PTBL フィールドに記述しなくても，NDL のようにタイトルとみなして，TR フィールドに記述してよいということか。

【回答】「記述するにとどめる」は，PTBL フィールドにシリーズ情報を記載するのみで，親書誌を検索・作成してリンク形成をしなくてよい，という意である。これまでの書誌構造の考え方に大きな変更はない。ただし，現在でも階層の考えに揺らぎのあるようなケースでは，解釈の違う書誌の並立を認める方針である。

18. 現行の OPAC では，PTBL の NCID をクリックすると子書誌一覧が検索結果に出る仕様になっているが，親書誌へのリンクを任意化すると，ノイズが発生するなど，その精度が落ちるのではないか。

【回答】リンクの任意化によるノイズ発生はないが，検索漏れは発生すると思われる。これは各図書館システムの OPAC の実装方法にもよるが，シリーズ名による網羅的なリンク付けを重視されるのであれば，リンクを張っていただきたい。

19. シリーズで継続購入している資料が単発で推薦された場合に，PTBL 等を見ることによって重複発注をチェックしているが，このリンクがないと重複を見逃して発注する恐れがある。

【回答】同一シリーズの書誌をリンク付けする必要がある場合に各機関で従来と同様にリンクを張り管理することは可能であり，必要に応じてリンクを張っていただきたい。

20. 書誌構造リンクが任意化になると，シリーズ名の記述やセットの関連はどのように変更されるのか。

【回答】子書誌の PTBL について，従来のような ID 入力によるリンクではなく，直接親書誌のタイトルを記述することを想定している。PTBL に対象を絞った検索の対応可否については，各図書館システムベンダーに確認している。

21. PTBL のリンクを残す, という話だが, シリーズ典拠を作成するという発想はないのか。
【回答】統一書名典拠は残すが，シリーズ典拠については検討していない。

3.1 外部機関作成データ

22. 事前登録書誌は BOOK として登録されるのか。RECON のように参照ファイルとなるのか。

【回答】書誌の並列および所蔵なし書誌の発生を抑えるために PREBOOK という新たな仕組みの導入を計画しているが，これは意見交換会の段階では検討中であったので紹介していなかった。仕組としては外部機関作成書誌のうち一定の条件をクリアした書誌はシステム的に PREBOOK に事前登録する。この時システム的な同定処理を行い並立となる書誌は登録しない。参加機関が PREBOOK 中の書誌に所蔵登録すると，自動的に BOOK に書誌を移行する。システムによる事前登録は PREBOOK のみとすることで BOOK 中の所蔵なし書誌発生を回避し，ILL 等での利用の便宜をはかる。なお，すべての参照 MARC の書誌は，PREBOOK に登録された書誌も含めて従来の参照ファイルに登録する予定である。

23. 外部機関作成データについて JPMARC,TRCMARC のほかの MARC は導入されるのか。多言語に対応した MARC(OCLC)の登録はどうか。

【回答】システム登録対象 MARC は現在の参照 MARC（ただし Z39.50 接続による参照は除く）と同一のもの（＝JP，LC，TRC，UK，GPO，DN）を予定しており，OCLC は予定していない。

参考:Z39.50 クライアント機能　http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/about/infocat/z3950/

24. 外部機関作成データはそれぞれ記述ルールが異なるが，そのまま所蔵登録するのか。または新たな入力基準が作成されるのか。

【回答】参照 MARC をシステム登録することにより，従来とは異なるルールで作成された書誌が混在することになるが，それを許容する，と言うことが今回の軽量化・合理化における大きな転換である。現行の基準およびコーディングマニュアルに最低限の変更を加えたものは準備するので，それで運用を進めていただきたいが，従来のように厳しく順守を求めるものではない。

25. 並立書誌を許容することにより，目録の品質が下がるため，書誌ユーティリティや総合目録の機能を維持できないのではないか。

【回答】意見交換会で説明していた並立書誌は，「JP,TRC など由来の異なる所蔵のない書誌が直接 BOOK に登録される」というものだったが，その後の検討により，「PREBOOK」の

しくみ作ることにした。これにより，原則として同じ資料に対する外部取り込み書誌は１つだけになる予定である。一方で，これまで書誌調整の対象になった，資料のタイトルや階層の解釈の違い，わずかな数量の違いにより作成される書誌は並立書誌として存在することになる。どの書誌に所蔵を付けるかは，各館の担当者の解釈となる。

26. 外部機関作成データでタイトルのとり方等が異なる場合，重複に気がつかずに発注する恐れがあるのではないか。

【回答】並立書誌がむやみに増加しないように書誌新規作成の基準を策定する等の方策をとる予定ではあるが，参加機関側でも ISBN 等でもチェックする等の運用による対策をとってほしい。

27. 現物をチェックしないでシステム登録した書誌データについて，誤ったデータが作成されることになるではないか。

【回答】システム登録書誌に直接所蔵登録した場合は，誤ったデータが作成されることはありうる。しかし発見館修正というポリシーを残すことにより，データを綺麗にすることは可能である。発見館修正不可である項目に誤りがあった場合には，新規に書誌を作成することになると考えている。

28. ISSN や ISBN は必ずしも物理体と 1 対 1 ではないと思うが，そのまま使うのか。また，外部データも階層の違い等，そのまま使うのか。

【回答】指摘内容は承知している。システム登録書誌を修正して使用することは可能である。また同じ資料に対して，階層，タイトルの取り方の解釈が異なることによって複数の書誌が作成される可能性はあるが，これは並立書誌として許容する方針である。

29. 同一図書に対して例えば JPMARC 由来，TRCMARC 由来のデータがあった場合，どの書誌に所蔵登録をすればよいのか。

【回答】システム登録時に機械的に登録する書誌のフィルタリングを行い，複数の外部機関作成データ登録による並立は回避することになったため，例示されたような事象は発生しない。参加館による複数の並立書誌が作成された場合に，どちらの書誌に所蔵を登録するかは各館の判断に任せることとなる。

参考：「NACSIS-CATILL の軽量化・合理化について（実施方針）」からの変更について

30. 所蔵登録した書誌に対して，その後，より情報がリッチな書誌等が並立で作成された場合に，並立書誌間での所蔵の付替えることは可能か。

【回答】いわゆる所蔵の付け替え処理については各館の運用に任せるが，NII のシステム上は所蔵データを削除し，付け替え先に新規登録することになる。

31. 事前のシステム登録書誌について，電子書籍書誌はシステム登録の対象となっているのか。

【回答】外部機関作成書誌データの中に電子書籍のデータが含まれていることはありうるが，システム登録時に電子書籍のデータを登録するか除外するかは，電子の作業部会も含めて今後検討する。

32. NACSIS-CAT に登録している MARC21 フォーマットの MARC のデータについて，使用していないタグは今までどおり，消すのか。元の MARC21 フォーマットのデータで提供はされないのか。

【回答】参照 MARC を元データで提供することは，有償で購入している機関との調整もあり，考えていない。マッピングの見直しは適宜実施するが，CATP で定義されていない項目については従来通りの扱いとなる。

33. ロシア語などは MARC に原綴りで入っていないので，外部機関作成データへの所蔵登録が可能になったとしても，今後も新規に作成しなければならないと考えているが，その認識でよいか。

【回答】その認識で良い。様々な言語への対応として，外部機関作成データからのマッピングについては，できるだけ情報をリッチにする方向で検討していかなければならないと考えているが，具体的な検討はこれからであり，また期限を切って対応するというよりは外部機関の作成するデータにあわせて随時アップデートしていくものであると考えている。現在は事前のシステム登録について，MARC の言語によって登録する・しないを変えるか検討している。例えば USMARC で入ってくる和書はタイトルがローマナイズされており，これをシステム登録して所蔵をつけて良いのか？等の話題が作業部会内で出ている。

34. 2020 以降に特にアジア資料について参照 MARC を増やしていく予定はあるか。

【回答】少なくとも 2020 の時点で新しい MARC が加わることは考えていないが，今後 Z39.50 でターゲットが増えることは考えられる。

35. NII の書誌を外部に提供しているか。日本国内で作成した書誌データの国際流通について，どのような方針があるのか。

【回答】NACSIS-CAT の書誌，典拠などは CiNii Books と同様の RDF 形式で公開し，これを活用して VIAF との連携も進んでいる。ただし，より積極的な国際流通について検討が進んでおらず，今後検討が必要だと考えている。

参考：http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/about/infocat/od/

36. 中国語の書誌は CHINA MARC と LCMARC から流用し，和書準拠の目録として記述している。これからは元の MARC のデータをそのまま使うのか。

【回答】中国語書誌についてまだ方針は決定していないが，LCMARC 中の日本語の書誌は事前のシステム登録は避ける方向で検討しており，和書準拠の中国語書誌も同様に事前のシステム登録は避ける方向で考えたい。

37. コピー元データとしての例外的利用(実施方針 3.1.2.2)にある「新基準に合致しない書誌データ」とは，どういった書誌データか。

【回答】複数の VOL グループをもつ書誌データや，ISBN をもたない書誌データが該当する。

3.2 著者名典拠データ

38. 外部機関著者名典拠 ID と著者名典拠データセットのマッチングは，何をキーにして行うのか。

【回答】バーチャル国際典拠ファイル（Virtual International Authority File：VIAF）に NII が参加したことによって，VIAF は外部機関著者名典拠 ID と NACSIS-CAT の著者名典拠 ID を保持しており，これらをキーにして，外部機関作成データの PREBOOK 登録時に著者名典拠 ID の書き換えを検討している。

参考：https://viaf.org/

39. 著者名典拠データと書誌データとのリンク間違いを発見した場合は，どのように対応すればよいか。

【回答】基本的には NII まで報告いただきたい。

40. 手動によるリンク解除・形成の機能は残るのか。また，手動で解除した場合，どの機関が処理したのか履歴は分かるのか。

【回答】手動によるリンク解除・形成機能も残す予定である。処理履歴の保存は考えておらず，現行同様に登録機関・最終更新機関のみ記録される予定である。

41. 著者名典拠はどのような扱いになるのか。データメンテナンスについて，人的リソースの限界があり，著者名典拠も人名はわかるが生没年がないデータや，論文を多く執筆されていて図書をあまり執筆されない著者の場合に NDL の典拠の方が豊かなことがあるが，そのあたりについてどのように考えているのか。

【回答】外部機関作成データや VIAF の活用は検討しているが，データのリッチ化については未検討である。

4 自動登録・自動リンクの強化

42. 自動登録とはどういったものを示すのか。現在自動登録を行っていない館にはイメージが掴みにくい。

【回答】自動登録とは，大量に所蔵登録する際に，ISBN 等の検索キーと RGTN 等の所蔵情報のデータのセットを作成し，NACSIS-CAT への所蔵登録を一括で行う処理である。

43. 「自動登録の精度の向上」について，ISBN 等の識別番号による所蔵自動登録で，その精度はどのくらいまで信用できるものか。 ISBN のないもの，ISBN が複数ある場合，誤った ISBN が付与されていた場合，セットも の自体にしか ISBN が付与されていない場合等は，手動で登録ということか。

【回答】「自動登録の精度の向上」とは，VOL 積中止により，VOL 積みされている場合には難しかった自動登録の効率を向上させるものである。ISBN での自動同定が困難なケースは手動登録になる。

44. ISBN 登場以前の本はどうするのか。　　例）ISBN：1965 年以降，英国で開発され国際的枠組みへの日本の参加は 1981 年。

【回答】機械的な書誌同定ができない書誌の自動登録は想定していない，手動登録となる。

45. 本学は現在，ダウンロードを使用した登録であるため，発注・登録時に仮に所蔵を付け，整理時に「NC 所蔵登録」をしている。しかし今後はアップロードのみになるのか。

【回答】今後も書誌のダウンロードのみの処理を禁止する予定はない。

5 レコード調整の廃止

46. 「発見館修正可」となる項目は修正できるということなので，システム的に修正の機能は維持されると考えて良いか。「発見館修正可」以外の項目は別書誌作成となるとのことだが，誤って修正した場合はどうすれば良いか。

【回答】システム的には書誌修正の機能を維持する。誤って修正してしまった場合についての処理方法は検討する。

47. 「重複書誌データを統合する」というのは現在の重複書誌の管理（報告，NII からの連絡，削除など）のことを意味するのか。また，この統合は機械的に行われるのか。

【回答】現行の重複書誌管理では重複と判断されるが，今後は重複でなく並立を許容するケースがあるので，現在の重複書誌管理と全く同じというわけではない。統合については手動の場合も機械処理の場合もある。

48. 連絡を必要とする書誌調整が中止になると，NACSIS-CAT と図書館システムでデータが違ったまま，となるのか。

【回答】書誌調整は中止するが，各図書館への連絡を中止するわけではない。NII と参加館の書誌調整は，検討中だが，残る可能性がある。通知方法についてはより効率的な方法を検討する。

49. 重複書誌の「統合」は，重複するいずれかの書誌内容を採用して他を捨てるのか，それともマージするのか。また，具体的な統合条件は何か。

【回答】重複対象となる書誌は，書誌の内容に異なる点が見られないものであり，いずれの書誌を採用ないしマージしても内容に変わりはない物を想定している。

統合対象となる書誌データの条件は，新規書誌作成の基準を充たさないものであり，具体的には 1) GMD/SMD ，2) VOL/ISBN，3) TR，4) ED，5) PUB，6) PHYS，7)NOTE ，8) PTBL，9) REPRO 等のフィールドが一致している場合である。

50. 「システム登録書誌データ」(JPMARC・TRCMARC)について修正可とすると，元の MARC データと著しく見た目の異なるデータとなる可能性があるが，作成元からはそういった更新は許容されうるのか。

【回答】参照 MARC の作成元からは，書誌の内容をそのままの形で保持するような条件は

課せられていない。

51. 資料データとして好ましくないもの（明らかに誤った書誌データ等）も多数存在するようになると思われる。その対応等はどのようになるのか。

【回答】書誌修正の基準についても準備し，明らかに誤ったものは発見館で修正可能にする。

52. ノイズが含まれる状態での検索に慣れるよう利用者に強いることにはならないか。

【回答】ノイズがどの程度発生するのかは，書誌作成の精度に依存するが，機械的に同定可能なものについては，CiNii Books 等では統合して表示することで，利用者の利便をはかりたいと考えている。

53. 誤字等に対して google の候補検索のような表記のゆらぎに対応できるようになるのか。

【回答】現時点では対応を予定していない。

54. 書誌調整を通して目録について学べる機会を得ていた面もある。書誌調整に代わる目録業務者同士の繋がりは作れないのか。

【回答】総合目録として運用して行く以上は，今後も何らかの形での連携が必要であろうと考えているが，NII ないし委員会としては未検討である。参加機関からの自発的なコミュニティ形成にも期待したい。

55. 並立書誌を作成する場合は，「並立書誌作成の根拠について NOTE に記述する」などのルールを設けるのか。

【回答】並立書誌の作成については，標題のとりかたの違いなどで作成する場合など，作成根拠の記述が容易ではない場合もあると考えているし，そこも許容することが今回の並立書誌作成の趣旨である。現時点では根拠の記述ルールを作る予定はない。

56. レコード調整が廃止されるということは，作成館が責任を持つという原則も廃止されることになるが，作成館という概念が廃止されるということか。

【回答】新規作成の場合は従来どおりに作成した館が作成館となる。PREBOOK 登録書誌の場合は，現状の RECON と同様に最初に所蔵を登録した館に最初に書誌を確認する責任がある。もし，自動登録した外部データ由来書誌に誤りがあればそれを修正したり，削除予定

レコードにして新規に書誌を作成することも可能である。レコード調整は廃止されるが，ある資料に対して責任も持ってデータを登録するというこれまでの考え方に変更はなく，書誌作成，所蔵登録いずれの場合も自律的に書誌と現物の確認を行ってほしい。

6.1 NACSIS-ILL

57. 現時点では ILL のメリットや軽量化・合理化が見えてこない。ILL の軽量化と CAT の電子リソースと冊子体データの切り離しは矛盾を感じる。電子リソースに対する所蔵館や ILL 可否に関する調査に時間がかかっているので，各館のライセンス情報を公開してほしい。

【回答】ILL の本格的な強化は，CAT2020 の次のフェーズであると考えている。I 電子リソースの取り扱いについては，効率的な方法を現在模索している段階。電子ジャーナル等で，契約年度ごとにアクセス条件が変わるものを冊子体の所蔵情報と同様に扱うのは困難であり，データの取扱い的には切り離さざるをえないが，ILL の対象としてシームレスに扱うことが，これからの学術情報システムには必要であると考えており，それにむけての新たな仕組みの実装が必要であると考えている。

58. 並立書誌を 1 つにしなくてもそのままで ILL をやってもいいのではないか。何か困ることはあるのか。

【回答】並立している書誌ごとに所蔵が割れた場合に，依頼先の選択が書誌ごとにしかできないため，効率が落ちることが想定される。

59. 2020 非対応のシステム利用館が ILL 依頼を行う場合，図書の書誌及び所蔵はどのように見えるのか。例えば，同一図書が重複して見えることもあるか。

【回答】書誌が並立している資料については，同一資料であっても書誌が複数あるように見える。

60. セルフラーニング教材の提供や Q&A DB は目録所在情報サービスへの質問に重きがおかれているように感じる。目録に不慣れな ILL 担当職員への研修などの必要性が今後ますのではないか。Q&A DB の CAT/ILL の切り分けも必要になってくるのではないか。

【回答】Q&A DB 利用について，CAT（書誌作成）と ILL（書誌利用）で切り分けていくことは検討したい。

61. ILL の再構築をするのならば複写を郵送ではなくデータのやり取りで行う方が安価かつ効率化に繋がるのではないか。

【回答】現在でも e-DDS 等のシステムも普及しつつあり，また電子送信に関する包括的な

許諾があっても進んでいないのが現状であると考えている。ILL については，CAT2020 の次のフェーズで本格的に強化策を考えて行きたいが，その際はシステムばかりでなく，業務モデルにも踏み込んだ議論が必要であると考えている。

6.1.1 書誌の名寄せ

62. 並立書誌の名寄せの仕組みはどのようになっているのか,
【回答】色々な検討を経て，機械的な名寄せはしない，という結論になった。ルールベースでやったほうがよいだろうと考えており, かつマージした書誌するのではなく, 並立した書誌間の対応表を機械処理で作成し，提供する。

63. 楽譜等の学術書以外の自動同定は検討されているのか。
【回答】学術書等の図書を中心に検討してきているが, 楽譜等の学術書とは異なる取り扱いが必要なものについては検討ができていない。今の所, 具体的な検討ができていないが, 具体例を提供していただけるとありがたい。

64. 西洋古典籍も同じ図書について書誌を別々に作っているので，自動同定の対象外にしてもらいたい。
【回答】RELATION は基本的には，ISBN のある資料に対してのみ有効なので，古典籍のような ISBN のない資料の書誌には適用されない。

65. 名寄せしたときに一つの名寄せ ID があり,それに紐づけるというような話があったが,作成する側が例えば 1-5 巻と 6 巻の書誌を名寄せしてほしい，といった要望を出すなり，名寄せ ID を付与するなり，といったことは想定していないのか。
【回答】1-5 巻と 6 巻の書誌を一体で見せることは名寄せの問題ではない。名寄せと言ってきたのはあくまでも同じ出版物理単位に対する作業のことである。並立している書誌に対しての関連付けについて，基本は NII 側で機械的に行う予定であるが，参加機関からのフィードバック方法についても検討する。

66. 装丁で VOL が異なる書誌については名寄せの対象になるのか。
【回答】pbk.や hbk.などのことであれば，それぞれ ISBN があればそれは別物・別書誌扱いになる。並立書誌ではないので名寄せはしない方向で検討している。

67. 平成 28 年 3 月 25 日公開の「基本方針（案）」において，96%の精度で名寄せが可能となっているとあるが，並立書誌を含んでのデータなのか 。
【回答】「基本方針（案）」の時点では，名寄せは人工知能を用いたテキストデータの名寄せ

であり，並立書誌を含んでいた。しかし現在の方針では名寄せは行わずに，識別子などをベースに照合することとなったので「基本方針（案）」の数値は参考にならない。

68. 名寄せについては，カーリルと京都府立図書館が「L-Crowd」というプロジェクトで実験が行われており，最終的な同定の判断は人間の目によって行っているが，NACSIS-CAT でも人間の目に判断を行う予定はあるか。

【回答】現在の実装方針は，L-Crowd のプロジェクトとは方向性が異なる。プロジェクトでは機械的な名寄せ処理を行なった上で最終的に人間による同定を行う，と聞いているが，本方針では機械的な名寄せ処理は行なわず，ISBN 一致等の一致と判断するためのルールを設定の上で，並立書誌間の対応付けを行う。その結果に対して，参加機関からの修正要請等のフィードバックは受け付ける予定であるが，処理のフローの中で，人間が同定するわけではない。

69. 稀覯書などの名寄せしない書誌は名寄せ不可フラグを立てるとのことだが，稀覯書以外でも名寄せ不可フラグを立てられるのか。

【回答】和漢古書や西洋古典籍は注記の特定語句などを用いて名寄せしない方法も考えているが，一般的な資料で，名寄せ不可フラグを使うことはないと考えている。

7 図書館システムへの対応

70. 運用ルール変更前に，事前にシステムをテストすることはできないのか。

【回答】NII の CAT/ILL 担当では影響範囲の洗い出しと，スキーマバージョンの更新も含めた対応策の検討を行っており，現在，全図書館システムベンダーを対象に説明とヒアリングを実施している。各ベンダー・図書館によるテストについても順次相談していきたい。

71. テスト環境は，ベータ版をみんなで触るということか。一部の図書館で検証することになるのか。

【回答】テストに関する詳細はこれから検討するが，各ベンダーはもちろんのこと，各ベンダーのいくつかの利用機関にもご協力いただいてテストをすることになると考えている。

72. 複数の分館が存在する機関の場合，NACSIS-CAT に同一図書に対して複数の並立書誌が存在すると，図書館システム内でも並立書誌が存在することになるのではないか。

【回答】実施方針を見直し，システム登録時に重複データのクリーニングを行うことになったので並立書誌の発生はかなり抑えられるが，それでも並立書誌は発生するし，機関内で並立書誌が発生することはありうる。目録業務について，参加機関ごとに業務フローが異なることが予想されるため一概には言えないが，書誌登録時にローカルシステムに同一の ISBN の書誌が登録されていないかどうかチェックすることで，ローカルデータの重複はかなり回避できると考えている。ISBN を持たない資料についてもローカル側の書誌を検索し確認することで重複は回避できるのではないか。

73. 2020 非適用の図書館システム利用館からも，システム登録書誌データは利用可能なのか。

【回答】実施方針の見直しにより，PREBOOK という新たなデータセットを設け，システム登録は PREBOOK のみに行う予定である。PREBOOK が見えるようにシステムを更新しなければ，システム登録書誌は見えない。しかし，JP や TRC 等は従来と同様に参照 MARC の形で提供する予定であり，現行と同様の書誌作成は可能である。

74. 2020 以降は，例えば複数の並立書誌をまとめた状態の書誌に別途 NCID が振られるのか，過去の BB・BA といった番号体系とどのような関係性になるのか。

【回答】2020 年 4 月以降に図書書誌データセットに登録される書誌データは，NCID のプ

レフィックスが現在の BB とは異なるものになる予定である。現在書誌の名寄せは想定していないため，NCID の付与単位は従来どおり書誌データごとということになる。

8 今後にむけて

75. 具体的にいつシステム入れ替えがあり，いつ運用面での変更が発生するのか。
【回答】システムについては，2020 年 4 月に切り替える想定で，2019 年度には各ベンダーがテスト可能な環境を準備する予定である。ただし，切り替え後も 2020 非対応図書館システムが使える前提で進めているため，運用については，一斉に切り替えていただく想定である。NACSIS―CAT 本体も改修が必要であり，全図書館システムベンダーと意見交換をすすめている。

76. ガイドラインはいつ公表されるか。
【回答】ガイドラインについては 2018 年度の第 1・2 四半期に出すことを目標にしている。多少の前後はあるだろうが，基本的には実施方針の付録資料のロードマップに沿って進める。

77. コーディングマニュアルの改訂は来年度以降か。また，改訂内容は CAT2020 への対応のみを踏まえたものか。または，例えば目次を入力できるフィールドを持つといった，データをリッチにするための変更も盛り込まれる予定はあるのか。
【回答】コーディングマニュアルを作業部会で一から作り直すのは難しく，図書館のご協力を募るかもしれない。今回の改訂は CAT2020 への対応のみを踏まえたものになる。より大きな改訂については，新 NCR への対応等とあわせながら検討するが，データのリッチ化については，従来の目録システムの中でのフィールド追加だけでなく，他のシステムとの連携によっての実現もはかっていく予定である。

9 その他

78. CATP のメタデータスキーマは変えないのか。

【回答】CATP のスキーマバージョンについては幾つかバージョンがあるが下位互換はある。スキーマバージョンを追加する場合でも，なるべく保守契約の範囲で，新たな費用負担なしに，追加予算なしに収めたい，と考えている。

79. 紙と電子の統合的発見環境についてどう考えていく予定なのか。他システムとの相互運用は可能なのか。

【回答】CATP は維持するため，相互運用性はそのままではないかと思うかもしれないが，VOL 積禁止で相互運用性は高まる。外部連携における変換ルールまでは現時点では未検討。

80. NACSIS-CAT の変更についてどのくらい周知が進んでいる，と考えているか。

【回答】実施方針を出しているが，認知度はまだこれからだと感じている。意見交換会を通じて不安が和らいだというご意見もある。検討課題は多いが，引き続き広報につとめていきたい。

81. 現在の NACSIS-CAT が採用している固有のタイトルは，Amazon や他の書店データと乖離があり，利用者に分かりづらいと感じている。新基準ではどのように対応するのか。

【回答】現行の固有のタイトルが，必ずしも利用者にとってわかりやすいものではないということは理解している。一方で，利用者にとってわかりやすい形でタイトルの切り出し方をルール化することは容易ではない。MARC のマッピングの見直しの中で検討したいと考えているが，全面的な解消は難しいかもしれない。

82. CAT を軽量化すると各組織の人的リソースがさらに減らされるのではないか，という懸念がある。

【回答】業務の効率化の追求が，今回の軽量化・合理化の目的であり，それにより浮いた人的リソースについて，人員削減という形で合理化するのか，他のサービス拡充に振替えるかは各組織の戦略次第と考えている。しかし，業務の効率化により目録業務のスキルが不要になるとは考えていない。学術情報システムを支える人材をいかに育成していくか，全国の参加機関と連携しながら考えていきたい。

83. 電子ジャーナルを 1000 タイトルほど CAT に登録したが，書誌がないタイトルについて情報源の提供等が大変であった。効率的な登録方法があるのか。

【回答】電子ジャーナルを CAT でどのように扱うかについては現時点では検討していないが, 電子リソースをどのように管理するかは, 電子リソース部会とも連携しながら今後検討していきたいと考えている。

A-3 運用ルール

84. RDA や改訂版日本目録規則への移行は段階的に行うという理解でよいか。また，それに伴って，目録情報の基準やコーディングマニュアルの整備は，具体的にはいつごろ行われる予定か。　基準やコーディングマニュアルが整備されていないと，現場でどのように CAT2020 を運用していくのか混乱が生じると考えられるので，早急に検討して欲しい。

【回答】RDA や新 NCR(改訂版日本目録規則)への移行は段階的という理解で良い。具体的には，国会図書館の新 NCR 対応にあわせて移行していく。それまでの間については，現行の基準およびコーディングマニュアルに最低限の変更を加えた暫定版を作成するので，それで運用を進めていただきたい。新 NCR への対応は次のフェーズと考えており，2020 年は前段階として書誌作成単位の物理単位への変更等の，システム的には対応が比較的容易なものを先行して行うものである。新 NCR への本格的な対応は大幅なシステム変更が予想されるため段階的に行いたい。

85. 廃止されることが確定しているレコード調整について，可能であれば現行基準における作業の緩和を検討していただきたい。

【回答】検討する。

86. 新基準に移行後は，参加館による書誌データ作成は，多言語資料，和漢古書，西洋古典籍といった難度の高い資料が中心になると予想され，ぜひとも研修体制の整備をお願いしたい。また，今後どのように参加館における目録担当者の人員配置，育成を行っていくかが課題になると考える。

【回答】人材育成は重要な課題と考えており，研修体制の整備も検討していくが，参加機関からの積極的な検討・提案も期待したい。

以上